

審査員特別賞

難民に対する活動を通して

筑波大学附属坂戸高等学校 3年 田沼 樹

私は中学生のときから人権問題について興味があった。人権問題に興味を持ち始めたきっかけはわからないが、ニュースや新聞などで人権の話があると見入ってしまう。そして高校の総合的な学習の時間では、日本の難民受け入れ問題について認知度を上げる活動を6人グループでしてきた。

この活動では、日本の難民受け入れ問題について「認知度を上げる」というミッションに到達すべく、交流会や映画上映会を行った。交流会はコロナの感染拡大防止のためオンラインで開催し、バングラディッシュ出身の難民当事者をお招きして、入管での出来事や難民として生きることについてお話をしていただいた。この交流会の前に私たちは、事前学習をたくさん行った。入管とは何か。そもそも難民の人はどこから来るのか。なぜ来なければいけなくなったのか、などをインターネットの記事や論文などでたくさん調べた。そうして、私たちは交流会を迎えた。実際に当事者の方からの話を聞いてみると、インターネットで調べたものを遥かに超える壮絶で貴重なお話を聞くことができた。そして、その時に自分がとても恥ずかしくなった。インターネットで調べた知識のみだった自分がこんなに未熟者であったのだとわかったからだ。しかし、このようにインターネットのみではわからないことが多くあるとわかったことで、インターネットのみならず、人とコミュニケーションを取ることで出てくる新しいものがあると、気づくことができた。

そして私たちは、直接人と会ってできる映画上映会を開催した。そこでは「人とのコミュニケーション」を大事にするため、直接参加者から感想を聞いた。また、映画の監督をお呼びして出演者の撮影時のお話をしていただいた。約2時間半の映画上映会で、約100名の方が参加してくださった。映画上映会は、前回のオンライン交流会よりも手応えを感じやすく、自分たちの活動を再度見直すことができた。

この「日本の難民受け入れ問題」について活動している団体は、非常に珍しく、多くの方に興味を持って私たちに注目していただけた。私たちも日本の難民受け入れが他の先進国に比べて圧倒的に少ないことから、この現状を広めるべく活動を始めた。それが、この地域や学校のみであったとしても広めることができた。

授業の活動期間が短かったため、この二つしか開催ができなかったが、期間外に活動報告としてSDGsに関するコンテストに出場した。これまでの私たちの活動を校外へ発信し、客観的な成果として優秀賞を取ることができた。それまでは、校内での活動が主だったため、自分たちの活動に自信が持てなかったが、初めてこのような評価を頂けて、自信を持つことができた。この活動を通して、私は校内の小さなフィールドから初めて社会に貢献できるのか心配に思っていた私に、誇りを持って「貢献できる」と言えるようになった。どんな小さなことでもそれは社会に貢献できるし、世界について知る大事な一歩だということをみんなに伝えたい。この証は私自身である。